8

イセリア英雄戦記

the legend of the Ierra war

編集 二次元ドリームマガジン編集部

挿絵 牡丹

立ち読み版

ぐちゅっ！　ぬっぷ、ぬっぷ……。男根に張りついた膣が揺さぶられ、欲望に従順な腰の動きの度に、快楽の塊がうねりきた。
「ふぐぅっ……、やめ、やめれ……ぇ」
もう表情を繕うこともできず、だらしないアヘ顔を晒してしまう。閉じられず掻き回されるばかりの口内から涎が漏れて、涙ぐんで潤んだ瞳にまで垂れていった。
「くう、なんてドスケベな穴だ。チンポに吸着して離さねえ。おお、くちゃくちゃ舐められて、うほ、持ってかれそうだぜ」
発情しきって赤く膨れた濡花弁が、しっとりと肉幹を包み、牝穴全体が甘えるように男根に絡みついた。
ぬぷっ、ぬぷっ、ぬぷ……っ。子宮口を小突き上げられると、
「んふー、ふぅ、ふぅ、切ないの、こみ上げふうっ！」
胎内に走った刺激が母性を揺さぶり、乳腺が一気に緩む。すると甘い衝動とともに、プシャ、ぷちゃぷちゃっ！　いくつもの亀頭に擦られていた乳首から、ミルクを噴き出してしまう。
「うお、こいつ、母乳を出しやがった。妊娠してんのか？」
「おもしれえ、もっと搾り出してやろうぜ」
何人もの男の手で、釣鐘状の美しい乳房が揉みくちゃにされた。大勢の手垢に汚されながら、脂肪が捏ねられる感覚に無数の悦が染み込んでくる。

「オッパイっ……らめぇっ、んっ、んっ、ぺちょ、じゅるじゅるぅ、バカになるぅ」
全身に与えられる性刺激に、理性が吹き飛びそうになってしまう。耐えようと喘ぐのに、カプっ……、膨らんだ乳首が誰かに甘噛みされて、
「ひぎっ！　イクぅううっ！」
プシャ――っ！　また母乳を大量に噴き上げながら、アクメの痙攣を見せた。
（し、死んじゃう。このままじゃ、イキ殺されちゃう）
いつの間にか、拘束された両手にも肉棒が握り締めさせられていて、それを反射的に扱き立ててしまっている。
「まらイクぅっ！　手マンコっ、イっちゃうぅ！」
今や全身が性感帯。手のひらが、口内が、男性自身を当てられる素肌のすべてが女陰になったかのようだった。
されるがままの肉便器。それが強く意識されると、どうしてかマゾヒズムの悦びが湧いてきた。このまま男たちの慰み者になる快感に溺れてしまえば、どんなに楽になれるだろう。
（ダ……メ……、果たすべきことが……あるのに……、セ……リーヌ……）
全身を駆け巡る悦楽に想いが塗り潰されて、淫らに喘ぎ狂うだけの肉魂に堕ちていく。
「おほっ、まだ締めつけやがる。まずは一発、飲み込みやがれ！」
ぬぶぶ――ッ！　一層苛烈になった突き込みに、子宮口が抉られて、肉と理性が揺さぶ

られた。
「いふぅ――っ！　イキ狂うぅ！　子宮っ、ぐちょぐちょぉぉんっ！」
絶頂の上に、絶頂が重ねられ、汗、唾液、淫蜜、身体中を自身の卑猥な汁塗れにさせている。
無意識のうちに肉壺が牡を満足させようと締めつけて、
「そ、そんなにザーメン欲しいか、この便所王女っ！」
こんなにも膨大な性刺激を与えられているというのに、フィオナの肉体は貪欲に求めてしまっていた。
欲しい……。熱くて、ドロドロした男性の情欲そのもので、自分の全身の内も外も埋め尽くして欲しい。
（いけ……ない。そんなこと、言……ったら……。あああっ、でも……）
身体中が肉棒に擦りつけられ、膣と口内が掻き回され、子宮が苛烈に揺さぶられ、募る。
もう精液便所でいい。
「く……くだはい……。ザーメンっ、ザーメンちょうらいっ！」
「よしっ、ほら、くれてやる！」
一層硬さを増した男根が子宮を内から跳ね上げて、
ドプッッ！　ドクドプドプッッ！
焼けつくような精液が子宮に溢れんばかりに注ぎ込まれた。

「うひ――っ！　ザーメンっ、きたァァん！　イ……っ、イイれふぅうう」
みっともないアクメ顔を晒しながら、仰け反りをきつくする。
（ふァ――っ！　熱い……、お腹が燃えるみたい。あ、ああ、また……）
まだ膣内で暴れる肉棒の跳ねに呼応するように、ビクっと身を痙攣させて、お尻をくねり躍らせた。
「くうっ、唇も淫乱すぎるぜ、うお！」
ひとりを皮切りに、
ブビュ！　ドピュルルッッ！
口内に、朱色を帯びた汗塗れた肢体に、次々と精液が振りかけられていった。素肌を垂れ落ちていく感触さえ、愛撫を受けているようで、アクメを味わい続けた肉体を悦楽で包む。
「ううううっ、ぷはァ……ハァ、ハァ、も、もう、らめ……」
飲み込めず、唇からドロっとザーメンを漏らしてしまい、鼻にかかり、涙ぐんだ瞳に垂れていく。大陸一と謳われた美姫の顔が牡液に塗れ、それでも汚し足りないと、顔射が続けられた。
卑猥に揉みしだかれる乳房も、引き締まった腹部や、太腿も、全身が精液に埋められてしまう。
「ふはァ、ハァ、ハァ……ザーメン……いっぱい……。フィオナ……精液便所に……、ハ

ァっ！」

どっと疲れを感じ、イキ癖のついてしまった肉体も自分の意思では動けない。快感の余韻が薄らいでいくと、疲弊していた理性がわずかに蘇ってくる。

（わたくし……何を口走って……、ザーメン？　精液便所？　いやァっ）

強張りを引き抜かれたばかりの肉壺はまだ男性自身の形状のまま開いて、捲れ上がったそこからダラダラと逆流した精液を漏らしていた。

「おいおい、へばってんじゃねえ。村の男、全員を相手してくれなきゃな」

半分呆けた状態で、肉体だけがやけに熱いのに、凍えたように震え続ける。全身が白濁に埋められ、濃厚な精液臭をもっともっとと求めていた。

「お前はもう、姫様でも何でもねえ、ただの精液便所なんだよ。このまま繋がれたまま、小便もウンコも垂れ流しのまま放置されるのさ」

度を越した快楽は地獄そのものなのに、心も身体も、貪欲にさらなる辱めを望んでしまう。

「まあ、あんまり臭くなったら、たまには洗ってやる。臭いのが好きな奴もいるから、いつになるかわかんねえけどな」

ゾッとする言葉の数々に、心は泣き叫びながら、肉体は歓喜していった。

「さあ、次が閊えているんだ。お前の血が白濁色になるまで、穴という穴にザーメン注ぎ込んでやる」

「人妻の割には拙いフェラだ。これでは飽きてしまう。早々に切り上げてグラマトン侵攻でも――」
「はあぁ――待って、待ってください！　わ、わかりました、私の本気、見せて差し上げます……！」
玉座を立とうとするギュスターヴをアリオナは制した。愛しい魔王のため、全力で男に奉仕しようと決める。
（そうよアリオナ、思うままオチンポを貪ればいいの）
自らに免罪符を与え、アリオナは大きく口を開き、太いカリをぱっくりと頬張って――。
「んぐっ……ぐっ、ぐぐぐむむっ！」
――ずるるっ、ごきゅるるっ！
「むぉっ、おぉ……これはいい、喉にまで押し込むとは」
少し身体を浮かせたアリオナは、斜め上から覗き込むようにして、カリを咽頭にまで呑み込んでいた。
そのまま窮屈な喉で締めつけ、全身を前後に揺すりながら柔らかい唇で根元も扱く。
「んぐっんぐっんごっ、ごごんんっ！」
（くっ、苦しいっ！　息ができない！　あ、頭、ぼーっとしてきて……はああでも、オチンポの味、奥に来るぅ……お、美味しいぃ……！）
ただでさえ太い男のカリは、細い首の狭い喉などぱんぱんに圧迫してしまう。首の骨す

ら押し広げるような強烈な感覚が美女を襲う。
自主的行為ではあるが、まるで肺や気管支までをも犯されていくかのよう。喉仏辺りにごりりと引っかかり眩暈と嘔吐感すらこみ上げる。
しかしそれでも、濃くなっていく牡臭さ、脈動していく血管の蠢き、心地よさげに開くエラが濡れた粘膜を抉る感触、そのすべてが、朦朧とする意識にふしだらな感情を与えていく。
（ああびくってしてる、睾丸もきゅってしてきて、射精したそうにしてる。ああん、おツユが喉にぬるぬる当たって、かっ、感じちゃうのおっ！）
被虐の悦びも知るアリオナは、窒息しそうな感覚の向こう、未知なる粘膜を擦られる刺激と胃袋にまで響く衝撃にさえ、腸が震えるような異様な恍惚を見出してしまっていた。
この硬く逞しい肉の棒がヴァギナにも叩き込まれると思うと、それだけで肉ヒダの疼きが止まらず大陰唇がネロリと開いていくのがわかる。
（まだ半起ちなのにこんなにきついっ……ああっ、なんて逞しいの。こんなオチンポがギンギンに勃起したら私、が、我慢できなくなっちゃうっ！）
高まる期待感と生殖本能が、美女の喉をきゅんとわななかせペニスをずりゅずりゅとしごき立てていく。肉欲が唾液をこんこんと湧き立たせ、粘膜のぬめりをより強くして肉棒奉仕をスムーズにしていく。
「んぐっんぐっぐっちゅぐっちゅっ！　ふーっふーっ！」

「おぉ……悪くない。狭い喉がぐいぐい締めつけおるわ」
これにはギュスターヴも確かな快楽を得ているようだ。いまだ余裕顔だがペニスははっきりと勃起しつつある。
「唇と喉で同時にしごくとは、さすが人妻。だがまだだ、このワシを篭絡したくばもっと大胆に誘ってみせんか」
彼は笑い、つま先でアリオナの陰部を擦った。ドレスのスカートが陰部に触れて破廉恥なシミが浮き出てくる。
「んぐっ……はあぁだめ、足なんかじゃなく、お、オチンポ、をぉ……」
「ふふん、もう濡らしおって。それ、淫売らしく誘ってみせよ」
「は……はいぃ……」
大口を開いただらしない面持ちでアリオナは従順に頷いた。頭の片隅にはかすかに嫌悪感が残っている。が、しかし、長さと径をいや増す肉棒、そのえぐい外見と禍々しい亀頭の魅力には抗うことなどできなかった。
(欲しい……もっと、もっともっといやらしくして、えぐいオチンポ生ハメして欲しい!)
これに貫かれ掻き回される度、喜悦で何もかも忘れられる。魔王様と生ペニスだけが私を蕩けさせてくれる。牝の本能にそう刻み込まれた女王は、憎き怨敵に犯してもらうべくその身体によじ登った。
「おお、あのアリオナ女王が何と浅ましい格好を……!」

（なんてこと……彼らは私を――いっ、犬と結婚させるつもりなんだわ!!）
想像だにしなかった事態に、アリオナは頭を強く打たれたような立ち眩みに襲われ言葉を失う。
そんな花嫁の内情など知る由もない黒犬は今も餌を探すみたいにしきりにキョロキョロと忙しなく辺りを見回しつつ男たちに連れられてゆっくりとこちらに近づいてくる。近づいてきてわかったことだが、アリオナの姿を映した犬の目つきは普通ではなかった。
「ああ、ウソよ…そんなこと……!!」
これまで幾多の男に陵辱されてきたアリオナだからわかった。信じられないことだが迫りくる犬は自分を牝として見ており――欲情していたのだ。
恐る恐る視線を獣の股間に向ければ案の定、そこではサラミを思わせる赤黒い肉棒が剥き出しとなって勃起し犬が歩く度ビクビクとしゃくり上げているのが見えた。
「あっ、貴女この犬にいったい何を!?」
犬がヒトに発情を催すなど普通では考えられない。淫魔の仕業を疑い潤んだ瞳でリファーネを睨むと、
「別に？　まあそのワンちゃんが自分の種族とヒトの区別がつかなくなるようにおまじないはしましたけど。犬の牡というのは発情期の牝が放つニオイに誘われて盛るんですのよ？　つまりそのワンちゃんが興奮しているのはアリオナ様、貴女が牝犬顔負けの発情臭を撒き散らしているってことですわ♥　――でもこれじゃ披露宴というより公開初夜にな

っちゃいますわねェ？」
サキュバスはそんな女王から向けられた非難の目を面白がるようにケラケラと笑いながら、自分の仕掛けた悪戯の種を明かす。
（私そんなに淫らなニオイを――!?）
獣を発情させている原因が当の自分だとなじられて、アリオナは羞恥に全身の肌が茹で上がるほど赤く染まる。恥辱に熱を孕んだ身体中の汗腺が開き、ますます淫らな牝のニオイを発して眼前の獣を誘ってしまっているような気がして女王は思わず肩を抱いた。
「やめてっひどすぎますこんな――」
人語すら介さぬ獣との婚姻。奇矯すぎる悪ふざけに抗議する女王だったが。
「じっ、冗談じゃない！」
答えたのはなぜか淫魔ではなく、犬を連れてきたイセリアの住民らだった。
「さっさとこのワンコロと番いになってヤラれてくれよ！　アンタ魔物の相手もしたことあるらしいじゃねえか、今更犬とだって抵抗ないだろ!?」
「女王だろうがあんたのおかげでこっちは命が危ないんだよ！」
あろうことか人々は口々に、犬とのまぐわいを要求してきたではないか。
「あっ、貴方たちいったい何を――」
驚きのあまり口元を押さえ目を見開いてその暴言の真意を問えば、
「アンタが俺たちの連れてきた犬にやられてくれりゃ魔王様の恩赦が受けられるんだ。女

王様だろ、なら俺たちのこと助けてくれよ、なぁっ!?」
どうやら自分が着替えている間、淫魔に誑かされたようだ。極限状態でのこととはいえ、いたたまれなくなる。同時に、彼らをそこまで追い詰める遠因が他ならぬ自分自身の失政にあると思うと為政者として忸怩たる思いに駆られ己が無力さに涙が滲んだ。
一方女王が放つ牝臭にすっかり発情させられた牡犬は、自らの妻となった彼女の心などわかるはずもなく――。
べろおぉぉぉ……!!
自分の牝だと誇示するように、ヴェールの隙間から女王の端整な顔を舐め回してきた。
「んっ…いっ、いやぁぁ……!!」
まるで死肉を頬に貼りつけられたかのような生温かな感触と、残飯を思わせる生臭い唾液のニオイに顔を顰める。嫌悪感から思わず顔を背け、身体を捻って膝立ちとなった瞬間。
「こらっ逃げるな、魔王様のお気持ちが変わったらどうしてくれるんだ!!」
どんっ！
激昂しアリオナの肩を打ったのは、先ほど女王を奴隷とした魔王の姿に憤って飛び出してきた若者だった。
「ひゃんっ!?」
つんのめったアリオナは自然と四つん這いの姿勢となる。
「おいっ、犬連れてこい……今の内にまぐわわせちまおうぜ！」

「ほら、ケツ出せケツっ!!」
バッ！　すかさず他の男がスカートを捲り上げると、下着を着けていないのですぐに雪色の美臀が露わとなった。四つん這いの姿勢のため、桃割れの奥に息づくピンク色のアヌスから鳶色の姫割れまでが丸見えだ。犬とアリオナを取り囲む男たちの間で感嘆と情欲のない交ぜになった熱い吐息が漏れた。
「みっ、見ないでぇぇっ……!!」
尻を左右に振り立て逃げ惑うも肩を押さえつけられているため立ち上がれず、むしろ尻を躍らせ獣を誘い込んでいるようにしか見えない。
女王が無駄な抵抗を試みている間にも淫魔によって生殖本能を狂わされた獣は花園から立ち上る芳香に誘い込まれて歩み寄り、ひょいと前脚を上げて牝腰の上へとのしかかってきた。
ずしり……ひょろりとした体躯の割に鉛のような重みが腕力のない女王を苛む。むせ返りそうなほど強烈な獣臭さが鼻を突く。嘔吐を催しそうなのに、臍の裏側の子宮はなぜかジンジンと甘く鳴いて異種の牡を待ち侘びていた。
（ああ、もう逃げられない……）
観念したアリオナはせめてこれから自分を襲うモノの姿を捉えようと頭を下げて背後を覗く。自らのたわわな乳釣鐘の向こう側、床と太腿のトライアングルの先にこれから自分を犯そうという獣が見えた。間近に見る犬の牡性器は肉の塊のように無数の血管が浮かび

上がっておりヒトのそれの何倍もグロテスクな姿をしていた。亀頭がなくまるで肉で作られた杭のようなその先端からはぽたぽたと濁った体液を垂らしているのが見える。
（ああ…あれで貫かれるんだわ私……あんな、おぞましいもので――♥）
犬のペニスを受け入れる――そう考えただけで膣道がキュンキュンと疼き、陰裂がひとりでにくちくちといやらしい音を立てた。
期待と不安を胸に抱きつつ息を殺して待ち構えていると、ぐっ、と前脚に体重が乗ってきた。太腿の裏側を獣の硬い体毛に撫でられるのが何とも言えずこそばゆい。
しかしそんな微細な刺激に反応している暇もなく――。
ずぶっ、ずぶずぶずぶぅぅぅ――――っっ!!
咲き綻んだ肉華に触れた獣根は根元まで一気に潜り込んできた。
「くうぅぅっ…んっっ♥」
膣内を満たす異種族の牡にアリオナはぶるっとその身を震わせ、たわわな乳釣鐘がぶるんっと揺れて打ちたわむ。
（ああ、すごいぃっ……これが犬のオチンポっ…なんて熱くって硬いの!?）
魔王の一物を始めとして両手で数えきれない数の逞しい男根を咥えさせられてきたアリオナだったが、今膣内に挿入っている牡の硬さはそれらとは根元的に違う鋼のような感触だった。柔らかな膣道をゴリゴリとこじ開けられると凄まじい快感に子宮を揺さぶられ腰が抜けたみたいになって、膝立ちでいるのさえ辛いほどだ。アリオナはたったひと突きで

相好を崩し、まるで積年の想い人に操を捧げた生娘みたいに甘く切ない表情を浮かべてしまう。

「うふふ、いい顔しちゃって……硬くっていいでしょう？　犬のおちんちんはヒトのものと違って中に骨が入っているの。硬いおちんちんにゴリゴリほじくられて普通の女ならあそこが裂けちゃうでしょうけど、淫売のアリオナ様にはむしろご褒美よねぇ？」

ヒトをどこまでも貶める淫魔の物言いにしかし女王は反論すらできない。だって彼女の言葉通り、獣棒の硬さにアリオナの膣壁は歓喜し淫らにヒクついて牡を食い締めていたのだから。

ズブッ！　ズブッ！　ジュブッ！　ズニュゥゥ……!!

やがて犬は踵を上げると、カクカクと浅ましい腰振りを開始した。犬のペニスには引っかかりになるエラ部分が存在しないため、その抽迭は恐ろしくスムーズだ。犬棒はまるでゼンマイ仕掛けの機械のようにスピーディかつ正確に、伸びやかなストロークで女の一番大切な場所を蹂躙してくる。

「あっんぅ、いやっ、深いぃぃっ!?」

ズンズンと子宮口を打つその衝撃はまるで破城鎚の如き力強さ。長年淫らな子宮枷に苛まれ、魔王にまで調教された肉体は獣さえ受け入れみるみる蜜を滴らせて応えてしまう。

（私っ、犬としている……獣とまぐわっている…家畜のお嫁さんにされちゃってる——!!）

はっはっはっはっ……耳元で絶え間なく聞こえる犬の息遣いが獣姦の事実を実感させる。柔肌を刺す獣毛のチクチクとした痒みに鳥肌が立った。

しかしそれはおぞましさ以上に恥辱を伴うマゾヒスティックな悦びとなって全身を電流のように駆け巡る。

「あらあらまあまあ、わんこ相手にそんなに気をやって。お亡くなりになった先王がご覧になったら、なんておっしゃるかしら。ねぇ、アリオナ様？」

淫魔が乳首から垂れ下がるピアスのリングに指を引っかけ、クイクイと刺激しながら問いかけてくる。

「ひゃうんっ♥　いやぁっ、夫のことはもお言っちゃいやぁぁっ!!」

またも最愛の人のことを思い起こされ、一瞬理性が獣悦を上回りそうになる。しかし背中にのしかかる魔畜はそれを許すまいとでも言うように腰振りの速度を上げて柔膣を穿ち、貫き、執拗にこね回す。

ずっずっずっずっぬくっぬぐっにゅぶにゅぷじゅぷぬぶぬぷ……!!

「ひあぁぁっそっそんなっ、そんなにはやくズポズポするのだめぇっ……あっ、んぁっ、あひっ、あひぇぇ……♥」

場末の娼館でも聞けないような蕩け声をあげながら、家畜女王は赤絨毯を掻き毟る。ひと突きごとに結合部から滲み出す愛液とともに理性までが溶け出してゆくかのよう、一気に獣強姦の魔悦へと引きずり込まれてしまう。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

電子書籍も配信中!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

隔月発売

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

隔月発売

大人気PCゲームのコミック多数連載!

電子版は毎月配信!
書籍版は偶数月発売!

コミック UNREAL アンリアル

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。